

博士論文（要約）

論文題目 成就の詩学—世阿弥能楽論の芸術論的特質—

氏 名 玉村 恭

# 目次

凡例

世阿弥 著作一覧

## 序論 1

1. 背景 /
2. 方法と手順

## I 俳優

### 第1章 俳優の魅力とは何か —— 〈花〉 12

1. 序 /
2. 〈花〉という比喻 /
3. 身の花 /
4. 心の花 /
5. 和合の花 /
6. 花の種の探求へ

### 第2章 面白いとはどういうことか —— 〈めづらし〉 31

1. 序 /
2. 意外性 /
3. 必然性 /
4. 出で来る花 /
5. 結

## II 演技

### 第3章 声はどこから出るか —— 〈一調・二機・三声〉 46

1. 序 /
2. 息としての機 /
3. 心の機 /
4. 陰陽の和合 /
5. 声と舞 /
6. 結

### 第4章 どうすればよく似せられるか —— 〈物まね〉 63

1. 序 /
2. 〈よく似せる〉 /
3. 〈成り入る〉 /
4. 〈大様な能〉 /
5. 物まねと音曲

## III 作品

### 第5章 作品をどう構成するか —— 〈序破急〉 84

1. 序 /
2. 作品存在とその統一性 /
3. 世阿弥の作品観 /
4. 〈終わり〉と〈まとまり〉 /
5. 自然物としての作品

**第6章 詞章をどのように綴るか —— 〈歌道〉 97**

1. 序 / 2. 曲折する文 —— 《班女》分析（一） / 3. 想像を飛翔させる —— 《班女》分析（二） / 4. 認知の混乱、理解の先送り

**IV 観客**

**第7章 観客に何を見せるか —— 〈秘すれば花〉 108**

1. 序 / 2. 秘することの〈大用〉 / 3. 観客は敵か？ / 4. 謎の創造性 / 5. 花ぞとも知らぬ花 / 6. 結

**V 教育**

**第8章 何を、どのように学ぶか —— 〈初心忘るべからず〉 122**

1. 序 / 2. 成長とはどのようなプロセスか / 3. 〈初心〉とは何か / 4. かつての自分とは誰か / 5. 存在することの彼方へ / 6. 花と初心

**結語 133**

1. まとめと成果 / 2. 課題

**参考文献 137**

## 本文

本論文の全体が図書として出版されており、契約内容により、全文公表できない。

玉村 恭『おのずから出で来る能：世阿弥の能楽論、または〈成就〉の詩学』、春秋社、2020年、ISBN：9784393930397

## 参考文献

### 邦語文献

- 青木孝夫 [1985a] 「世阿弥の能楽論に於ける〈花〉について：解明の試み」、『美学』36-2、36-48 頁
- \_\_\_\_\_ [1985b] 「世阿弥の能楽論に於ける〈物まね〉について」、『理想』629、162-269 頁
- \_\_\_\_\_ [1989] 「能楽の〈型〉について：世阿弥の能楽論に即して」、『日本の美学』13、40-60 頁
- 浅田彰 [1983] 『構造と力：記号論を超えて』、勁草書房
- 安蘇谷正彦 [1984] 「中世神道思想と外来思想」、『季刊日本思想史』22、31-46 頁
- 尼ヶ崎彬 [1983] 『花鳥の使：歌の道の詩学Ⅰ』、勁草書房
- \_\_\_\_\_ [1988] 『日本のレトリック：演技する言葉』（ちくまライブラリー）、筑摩書房
- \_\_\_\_\_ [1995] 『縁の美学：歌の道の詩学Ⅱ』、勁草書房
- \_\_\_\_\_ [2017] 『いきと風流：日本人の生き方と生活の美学』、大修館書店
- 天野文雄 [1990] 「世阿弥のいる場所 デビューの頃：醍醐寺・新熊野社など」（特集：世阿弥 都市の言葉、都市の劇場）、『国文学 解釈と教材の研究』35(3)、48-52 頁
- \_\_\_\_\_ [2000] 「世阿弥と禅：『六祖壇経』をめぐる」、『国文学 解釈と鑑賞』65(10)、163-173 頁
- \_\_\_\_\_ [2006] 「世阿弥の芸道思想と禅：『花鏡』の〈一行三昧〉をめぐる」、『禅文化』241、23-31 頁
- \_\_\_\_\_ [2007] 『世阿弥がいた場所：能大成期の能と能役者をめぐる環境』、ペリかん社
- \_\_\_\_\_ [2009a] 『能苑逍遥（上） 世阿弥を歩く』、大阪大学出版会
- \_\_\_\_\_ [2009b] 『能苑逍遥（中） 能という演劇を歩く』、大阪大学出版会
- \_\_\_\_\_ [2010a] 『能苑逍遥（下） 能の歴史を歩く』、大阪大学出版会
- \_\_\_\_\_ [2010b] 「これからの世阿弥の芸論研究に向けて：〈外からみた世阿弥の芸論〉の趣旨など」（テーマ研究：外からみた世阿弥の芸論）、『能と狂言』8、91-92 頁
- \_\_\_\_\_ [2011] 「〈一切の事（コト）〉と〈一切の事（ジ）〉：世阿弥と禅の出会い、『問答条々』『花修』『別紙口伝』の改訂など」、『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』4、43-53 頁
- \_\_\_\_\_ [2016] 「禅の〈無〉と世阿弥の〈無〉：『六祖壇経』をめぐる」、天野文雄（監修）『禅から見た日本中世の文化と社会』、ペリかん社、115-1129 頁
- アリストテレス・ホラーティウス [1977] 『詩学・詩論』（岩波文庫）、松本仁助・岡道男訳、岩波書店
- 生田久美子 [1987] 『〈わざ〉から知る』（認知科学選書14）、東京大学出版会

- 石黒吉次郎 [1993] 『中世芸道論の思想：兼好・世阿弥・心敬』、国書刊行会  
 \_\_\_\_\_ [2003] 『世阿弥』（日本の作家 100 人・人と文学）、勉誠出版
- 今泉淑夫 [2009] 『世阿弥』（人物叢書）、吉川弘文館
- 岩井茂樹 [2005] 「〈日本的〉美的概念の成立：能はいつから〈幽玄〉になったのか?」、『日本研究』（国際日本文化研究センター）31、69-114 頁
- 岩倉さやか [2004] 「世阿弥能楽論における態と心：花の成立の意味と構造を巡って」、『語文研究』97、1-14 頁  
 \_\_\_\_\_ [2006a] 「離見と感：世阿弥能楽論における〈妙所〉への眼差し」、『文学』7(2)、217-226 頁  
 \_\_\_\_\_ [2006b] 『花と自己変容：世阿弥能楽論研究』（九州大学博士論文）  
 \_\_\_\_\_ [2007] 「主になる心：〈有主風〉の意味を巡って」、『国際関係・比較文化研究』6(1)、258-246 頁
- 植木朝子 [2002] 「〈ぼうをく〉小考：世阿弥の音曲論をめぐって」、『Zeami』1、112-127 頁
- 上野太祐 [2017] 『花伝う花：世阿弥伝書の思想』、晃洋書房
- 内田樹 [2004] 『死と身体：コミュニケーションの磁場』、医学書院  
 \_\_\_\_\_ [2007] 「複素的身体性論：無敵の探求」、石川准（編）『脈打つ身体』（身体をめぐ  
 るレッスン3、岩波書店）、153-178 頁（内田『私の身体は頭がいい』〔文春文庫、2007 年〕  
 所収）
- 内田樹・安田登 [2017] 『変調〈日本の古典〉講義』、祥伝社
- 大谷節子 [2000] 「世阿弥と禅覚書」、『文学』1(6)、51-65 頁  
 \_\_\_\_\_ [2007] 『世阿弥の中世』、岩波書店
- 大友泰司 [2007] 『世阿弥と禅』、翰林書房
- 大西克礼 [1939] 『幽玄とあはれ』、岩波書店
- 岡田利規 [2013] 『遊行：変形していくための演劇論』、河出書房新社
- 小川剛生 [2005] 「良基と世阿弥：《良基消息詞》偽作説をめぐって」、『ZEAMI』3、186-203  
 頁（小川『二条良基研究』〔笠間書院、2005 年〕所収）
- 小川豊生 [2005] 「中世神道における禅の強度：〈中世神学のメチエ〉続稿」、『文学』6(6)、  
 92-105 頁
- 落合博司 [2000] 「『花伝』奥義篇再考」、『文学』1(6)、77-87
- 表章 [1967] 「世阿弥：その能芸論展開の時期区分を中心に」、『講座日本文学6 中世篇Ⅱ』、  
 岩波書店、165-192 頁（表『能楽史新考（二）』、わんや書店、1986 年、所収）  
 \_\_\_\_\_ [1981] 「〈花伝〉から〈風姿花伝〉への本文改訂」、『語文』38、49-61 頁  
 \_\_\_\_\_ [2002] 「〈世阿弥と禅林用語〉小考：〈ジョーシキ〉の語を中心に」、『禅文化研究  
 所紀要』26、113-140 頁  
 \_\_\_\_\_ [2003] 「『花伝』の書名と篇名をめぐって」、『能と狂言』1、8-16 頁  
 \_\_\_\_\_ [2005] 『大和申楽史参究』、岩波書店

- \_\_\_\_\_ [2008] 『観世流史参究』、檜書店
- \_\_\_\_\_ [2009] 「世阿弥の貴人尊重説の振幅と背景：〈問答条々〉第一条第二節後年増補説」、  
『能と狂言』7、39-53 頁
- 表章（校訂） [1955] 『世阿弥・禅竹』（日本思想大系新装版）、岩波書店
- 表章・竹本幹夫 [1988] 『能の伝書と芸論』（岩波講座能・狂言 2）、岩波書店
- 尾本頼彦 [2010] 『世阿弥の能楽論：花の論の展開』、和泉書院
- 小田部胤久 [2001] 『芸術の逆説：近代美学の成立』、東京大学出版会
- \_\_\_\_\_ [2009] 『西洋美学史』、東京大学出版会
- 加藤周一 [1995] 「世阿弥の戦術または能楽論」、表（校訂） [1995]、515-541 頁
- 門脇佳吉 [1992] 「世阿弥における気思想」、『人体科学』1(1)、1-6 頁
- \_\_\_\_\_ [1996] 「世阿弥の超・美学（メタ・エステティカ）」、『哲学論集』25、11-26 頁
- 金井清光 [1969] 『能の研究』、桜楓社
- \_\_\_\_\_ [1983] 『風姿花伝詳解』、明治書院
- 金子直樹 [2018] 『僕らの能・狂言：13 人に聞く！これまで・これから』、淡交社
- 亀谷敬三 [1967] 「世阿弥の風体文芸論：『花鏡』を中心に」、『九州女子大学紀要』3(1)、19-37 頁
- \_\_\_\_\_ [1968] 「『花鏡』の文芸理論：その詩的発想の中世的構造に就いて」、『九州女子大学紀要』4、1-22 頁
- \_\_\_\_\_ [1971] 「能楽論における世阿弥の推論過程：『至花道』を頂点に」、『九州女子大学紀要』7(1)、1-11 頁
- \_\_\_\_\_ [1972] 「美意識に関する世阿弥の体系的考察の主軸に就いて：『却来花』を頂点に」、  
『九州女子大学紀要』8(1)、1-8 頁
- 観世寿夫 [1980] 『世阿弥の世界』（観世寿夫著作集 1）、平凡社
- \_\_\_\_\_ [1981a] 『仮面の演技』（観世寿夫著作集 2）、平凡社
- \_\_\_\_\_ [1981b] 『伝統と現代』（観世寿夫著作集 3）、平凡社
- \_\_\_\_\_ [1981c] 『能役者の周辺』（観世寿夫著作集 4）、平凡社
- 金谷治（訳注） [2000] 『孫子』（岩波文庫）、岩波書店
- カント、イマヌエル（Kant, Immanuel） [1999] 『判断力批判 上』（カント全集 8）、牧野英二訳、岩波書店（*Kritik der Urteilskraft*, 1790/1793/1799）
- 北川忠彦 [1972] 『世阿弥』（中公新書）、中央公論社
- \_\_\_\_\_ [1983] 「〈物学条々〉から〈三体〉論へ」、『文学』51(7)、47-56 頁
- 倉沢行洋 [1984] 「世阿弥の花の思想」（特集：花）、『日本の美学』3、64-83 頁
- \_\_\_\_\_ [1987] 『芸道の哲学：宗教と芸の相即』（増補版）、東方出版
- 黒川雅之 [2006] 『八つの日本の美意識』、講談社
- 黒田正男 [1979] 『世阿弥能楽論の研究』、桜楓社
- 小島順子 [1994] 「『花鏡』芸論考：〈かん〉（感・勘）について」、『星美学園短期大学研究論

叢 26

- \_\_\_\_\_ [1997] 『花鏡』 芸論考 (二) : 続〈かん〉(感・勘) について、『星美学園短期大  
学研究論叢 29
- 小林静雄 [1943] 『世阿弥』、檜書店
- 小林智昭 [1952] 「世阿弥研究：心の論理」、『国語と国文学』 29(5)、17-27 頁
- 小西甚一 [1961] 『能楽論研究』、塙書房
- 香西精 [1962] 『世阿弥新考』、わんや書店
- \_\_\_\_\_ [1970] 『続世阿弥新考』、わんや書店
- \_\_\_\_\_ [1972] 『能謡新考：世阿弥に照らす』、わんや書店
- 後藤丹治・岡見正雄 (校注) 『太平記 (三)』 (日本古典文学大系)、岩波書店、1957 年
- 小西甚一 (編訳) [2004] 『世阿弥能楽論集』、たちばな出版
- 佐伯梅友 (校注) [1958] 『古今和歌集』 (日本古典文学大系)、岩波書店
- 相良亨 [1990] 『世阿弥の宇宙』、ペリかん社
- 佐々木香織 [2004a] 「世阿弥伝書における〈衆人愛敬〉：歴史的背景を中心として」、『倫理  
学』 20、71-81 頁
- \_\_\_\_\_ [2004b] 「時間芸術が与る偶然性：世阿弥伝書を中心に」、『比較思想研究』 31、31-  
34 頁
- \_\_\_\_\_ [2004c] 「初期世阿弥伝書における〈時〉に対する構想」、『哲学・思想論叢』 22、  
79-91 頁
- \_\_\_\_\_ [2007] 『拾玉得花』における〈序破急〉：世阿弥の思想変遷への予備的考察、『倫  
理学』、77-86 頁
- \_\_\_\_\_ [2008] 「芸術において〈出で来る〉もの：世阿弥伝書と実存思想との比較から」、  
『比較思想研究』 35、73-80 頁
- \_\_\_\_\_ [2015] 「序破急概念の変遷：世阿弥『拾玉得花』を中心に」、『日本思想史学』 47、  
72-88 頁
- 佐々木健一 [1985] 『作品の哲学』、東京大学出版会
- \_\_\_\_\_ [1995] 『美学辞典』、東京大学出版会
- 佐藤和道 [2009] 「世阿弥発見：吉田東伍と『世阿弥十六部集』」 (特集 世阿弥伝書発見から  
100 年)、『観世』 76(5)、26-33 頁
- 澤野加奈 [2002] 「世阿弥の〈鬼〉再検：〈碎動風〉〈力動風〉の位相の変遷」、『待兼山論叢』  
36、53-75 頁
- \_\_\_\_\_ [2003] 「世阿弥における物狂能の展開：〈放下〉〈遊狂〉〈物狂〉の語義の検討から」、  
『芸能史研究』 163、18-30 頁
- \_\_\_\_\_ [2005] 「〈妙〉の現出をめぐる世阿弥の思索：その方法と位の問題を中心に」、『フ  
ィロカリア』 22、53-64 頁
- \_\_\_\_\_ [2009] 「世阿弥伝書の〈足踏〉：その意味をめぐる」、『演劇学論集』 48、17-30

頁

- 椎名亮輔 [1987] 「世阿弥の音楽概念に関する試論：〈調子〉をめぐって」、『比較文学・文化論集』5、87-94 頁
- 重田みち [1996] 『花伝』成立の初期の経緯と世阿弥の〈花〉、『能：研究と評論』21、1-14 頁
- \_\_\_\_\_ [1999a] 「〈初心忘るべからず〉と『宗鏡録』、『鍔仙』475
- \_\_\_\_\_ [1999b] 「世阿弥能楽論における『詩』受容をめぐって：『遊楽習道風見』『音曲口伝』の『詩』説」、『中世文学』44、82-90 頁
- \_\_\_\_\_ [2000] 「初期三書から『花伝』へ、『花伝』から『風姿花伝』へ」、『文学』1(6)、31-43 頁
- \_\_\_\_\_ [2001] 「世阿弥の〈花〉」、『紫明』8、42-46 頁
- \_\_\_\_\_ [2003] 『花伝』第六花修理の本文変更：義持新時代における世阿弥の転向、『芸能史研究』163、31-43 頁
- \_\_\_\_\_ [2004] 『花伝』第七別紙口伝の成立と世阿弥能楽論の転機：別紙草稿の推定ならびに義持時代における内容変更、『立命館文学』585、1-17 頁
- \_\_\_\_\_ [2006a] 『花伝』「奥義」執筆の契機と意図：世阿弥能楽論における〈風体〉〈十体〉、『日本文学』55(2)、9-17 頁
- \_\_\_\_\_ [2006b] 『風姿花伝』の完成と世阿弥の思想：増阿弥の存在のかかわりの可能性、『芸能史研究』172、16-28 頁
- \_\_\_\_\_ [2006c] 「世阿弥の〈基調象徴〉と〈基調観念〉：時間の〈<sup>フィールド</sup>場〉化」、『アート・リサーチ』6、60-72 頁
- \_\_\_\_\_ [2006d] 「世阿弥能楽論の〈人体〉〈老体〉の概念形成」、『国語国文』75(3)、19-33 頁
- \_\_\_\_\_ [2007] 「世阿弥能楽論『風曲集』に見える一禅語の解釈とその思想史的背景：一に多種有り、二に両般無し」、『立命館文学』601、19-29 頁
- \_\_\_\_\_ [2009] 『世阿弥の思想と能楽』（慶應義塾大学博士論文）
- \_\_\_\_\_ [2012] 「大様なる能と世阿弥の脇能」、『芸能史研究』198、1-29 頁
- \_\_\_\_\_ [2014] 「世阿弥の能楽伝書『花伝』花修篇の性格と相伝に関する問題」、『演劇研究』38、1-14 頁
- \_\_\_\_\_ [2015] 「足利義持時代の美意識：世阿弥の芸論の冷え・さび・無文」（芸論・芸談研究の最前線）、『芸能史研究』208、25-43 頁
- \_\_\_\_\_ [2017] 『花伝』から『風姿花伝』への書き替えに見る世阿弥の〈歌舞能〉志向：〈舞がかり〉と歌道の重視へ、『演劇研究』41、1-16 頁
- 篠原資明 [1992] 『トランスエステティック：芸術の交通論』、岩波書店
- \_\_\_\_\_ [2008] 「あいだ哲学論考」、『いま〈哲学する〉ことへ』（岩波講座哲学1）、岩波書店、183-203 頁

- 新川哲雄 [1977] 『人間世阿弥：ある申樂者の思念』、芸立出版
- \_\_\_\_\_ [1985] 『〈生きたるもの〉の思想：日本の美論とその基調』、ペリカン社
- スタニスラフスキイ、コンスタンチン (Stanislavski, Constantin) [1975] 『俳優修業 第一部』、山田肇訳、未来社 (*An Actor Prepares*, translated by E. R. Hapgood, Theatre Arts, 1936)
- 鈴木文孝 [1997] 「世阿弥の〈離見の見〉」、『愛知教育大学研究報告 (人文科学・社会科学)』 28、134-146 頁
- 鈴木貞美・岩井茂樹 (編) [2006] 『わび・さび・幽玄：〈日本的なるもの〉への道程』、水声社
- 瀬尾幹夫 [2001] 「世阿弥、所謂〈物まね〉と〈初心忘るべからず〉考」、『人文・自然・人間科学研究』 5、271-280 頁
- 田井庄之助 [1965] 「世阿弥の芸風をめぐる二、三の問題」、『芸能史研究』 10、15-26 頁
- 高島元洋 [1984] 「能における他界観と呪術の意味 (謡曲の思想)」、『季刊日本思想史』 24、24-41 頁
- \_\_\_\_\_ [1989] 「世阿弥における《道》とその世界像」、『日本思想 I』 (岩波講座東洋思想)、188-231 頁
- 高野敏夫 [1986] 『世阿弥：〈まなざし〉の超克』、河出書房新社
- \_\_\_\_\_ [1987] 『世阿弥の後姿』、河出書房新社
- 竹内晶子 [1998] 「能と連歌のテキスト空間：意味のずらし、比喩の再生」、『国文学 解釈と教材の研究』 43(14)、57-63 頁
- \_\_\_\_\_ [1999] 「作品研究《班女》」、『観世』 66(4)、24-31 頁
- \_\_\_\_\_ [2005] 「禅竹と比喩：《熊野》を手がかりに」、『ZEAMI』 3、73-88 頁
- 竹内整一 [2004] 『〈おのずから〉と〈みずから〉：日本思想の基層』、春秋社
- \_\_\_\_\_ [2011] 『花びらは散る 花は散らない：無常の日本思想』 (角川選書)、角川書店
- \_\_\_\_\_ [2012] 『やまと言葉で哲学する：〈おのずから〉と〈みずから〉のあわいで』、春秋社
- 竹内敏雄 [1935] 「世阿弥に於ける〈幽玄〉の美的意義」、『思想』 155、517-545 頁
- 竹本幹夫 [1999] 『観阿弥・世阿弥時代の能楽』、明治書院
- \_\_\_\_\_ [2003] 「吉田文庫世阿弥能楽論資料紹介」、『文学』 4(4)、199-206 頁
- 竹本幹夫 (訳注) [2009] 『風姿花伝 三道』 (角川ソフィア文庫)、角川学芸出版
- 田中久文 [2013] 『日本美を哲学する：あはれ・幽玄・さび・いき』、青土社
- 田中規子 [1979] 「世阿弥の鬼」、『芸能史研究』 65、25-38 頁
- 田中裕 [1977] 「秘すれば花：何を秘するかではなく、秘すること」、『国文学 解釈と鑑賞』 42(3)、94-102 頁
- 田中裕 (校注) [1976] 『世阿弥芸術論集』 (新潮日本古典集成)、新潮社
- 谷崎潤一郎 [1960] 『谷崎潤一郎集 (二)』 (現代日本文学大系)、筑摩書房
- 谷山茂 [1943] 『幽玄の研究』、教育図書

- 玉村恭 [2005] 「金春禅竹の音曲論」、『美学芸術学研究』24、82-103 頁
- \_\_\_\_\_ [2007] 「遁世と詩歌：鴨長明『方丈記』『発心集』の遁世観と詩歌観」、『美学』58(2)、15-28 頁
- \_\_\_\_\_ [2009] 「世阿弥能楽論研究のあゆみ：その面と裏」（特集 世阿弥伝書発見から 100 年）、『観世』76(6)、26-32 頁
- \_\_\_\_\_ [2011] 「〈かかり〉はどこから・どこへ・どこで生ずるのか：世阿弥伝書の英訳比較を通じて」、『能楽研究』36、159-180 頁
- \_\_\_\_\_ [2014] 「教訓抄：王朝社会のミュージッキング」、宇佐美文理・青木孝夫（編）『芸術理論古典文献アンソロジー 東洋篇』、京都造形芸術大学・東北工科大学出版局芸術学舎、271-278 頁
- \_\_\_\_\_ [2015] 「君の名残をいかにせん：能《巴》〈うしろめたさ〉のナラトロジー」、松尾葦江（編）『文化現象としての源平盛衰記』、笠間書院、471-487 頁
- 丹波明 [2004] 『〈序破急〉という美学：現代によみがえる日本音楽の思考型』、音楽之友社
- 土屋恵一郎 [2001] 『能：現在の芸術のために』（岩波現代文庫）、岩波書店
- \_\_\_\_\_ [2013] 『世阿弥の言葉：心の糧、創造の糧』（岩波現代文庫）、岩波書店
- 筒井佐和子 [1989] 「世阿弥伝書における〈無心〉：『花鏡』『拾玉得花』を中心として」、『美学』39(4)、24-36 頁
- 戸井田道三 [1954] 「世阿弥と修羅能」、『文学』22(9)、60-68
- \_\_\_\_\_ [1963] 「表現から見た世阿弥の特色」、『国文学』8(1)、43-49 頁
- \_\_\_\_\_ [1969] 『観阿弥と世阿弥』、岩波書店
- 堂本正樹 [1986] 『世阿弥』、劇書房
- \_\_\_\_\_ [1990] 『演劇人世阿弥：伝書から読む』（NHK ブックス）、日本放送出版協会
- \_\_\_\_\_ [1992] 『中世芸能人の思想：世阿弥あとさき』、角川書店
- 富山泰雄 [1989] 「世阿弥における〈かかり〉の構造（上）」、『芸能史研究』107、34-50 頁
- \_\_\_\_\_ [1990] 「世阿弥における〈かかり〉の構造（下）」、『芸能史研究』108、10-27 頁
- 中井正一 [1995] 「気の日本語としての変遷」、『中井正一評論集』（岩波文庫）、岩波書店、176-206 頁
- 中西紗織 [2011] 「世阿弥の伝書に見える声に関する一考察」、『北海道教育大学紀要 教育科学編』62(1)、65-70 頁
- \_\_\_\_\_ [2013] 「世阿弥の伝書に見える声に関する一考察（2）：一調、二機、三声に焦点をあてて」、『釧路論集：北海道教育大学釧路分校研究報告』45、99-105 頁
- \_\_\_\_\_ [2016] 「世阿弥の伝書に見える声に関する一考察（3）：『音曲口伝』における声の使い方」、『北海道教育大学紀要 教育科学編』67(1)、335-341 頁
- \_\_\_\_\_ [2017] 「世阿弥の伝書に見える声に関する一考察（4）：『曲付次第』第七条における〈息〉の問題」、『釧路論集：北海道教育大学釧路校研紀要』49、123-128 頁
- 中村格 [1985] 『世阿弥伝書用語索引』、笠間書院

- 中村泰子 [1992] 「世阿弥の〈初心不可忘〉」、『青須我我良』43、51-60 頁
- 成川武夫 [1980] 『世阿弥：花の哲学』、玉川大学出版会
- 西一祥 [1976] 『世阿弥研究』、桜楓社
- \_\_\_\_\_ [1985] 『世阿弥：人と芸術』、桜楓社
- \_\_\_\_\_ [1986] 『世阿弥論』(増訂版)(国語国文学研究叢書)、桜楓社
- 西尾久美子 [2018] 「企業家としての世阿弥：『風姿花伝』を人材育成と事業システムの観点から読み解く」、『現代社会研究』20、15-36 頁
- 西尾実 [1965] 『道元と世阿弥』、岩波書店
- \_\_\_\_\_ [1974] 『世阿弥の能芸論』、岩波書店
- 西尾実・安良岡康作(校注)『新訂 徒然草』(岩波文庫)、岩波書店、1985 年
- 西野春雄 [1980] 「世阿弥の作劇法：能作の流れの中で」、『国文学』25(1)、63-69 頁
- \_\_\_\_\_ [1990] 「世阿弥訛伝：世阿弥の芸論はいかに誤解されてきたか」、『国文学』35(3)、68-75 頁
- 西平直 [2004a] 「世阿弥の還相：還相における〈他者〉の問題」、『思想』960、167-186 頁
- \_\_\_\_\_ [2004b] 「他者理解とその〈成就〉：世阿弥〈離見の見〉を手掛かりとして」、『人間性心理学研究』22(1)、105-113 頁
- \_\_\_\_\_ [2004c] 「世阿弥の稽古論再考：〈稚児の身体〉と〈型〉の問題」、『教育学年報』10、395-417 頁
- \_\_\_\_\_ [2007a] 「子どもと無心：世阿弥における稽古の逆説」、『哲学雑誌』112、58-76 頁
- \_\_\_\_\_ [2007b] 「世阿弥〈伝書〉における〈いまここ〉：時に用ゆるをもて、花と知るべし」、『人間性心理学研究』25(2)、115-126 頁
- \_\_\_\_\_ [2009a] 「発達と超越の交叉反転としての〈超越性〉：世阿弥〈伝書〉を手掛かりとして」、『教育哲学研究』100、263-278 頁
- \_\_\_\_\_ [2009] 『世阿弥の稽古哲学』、東京大学出版会
- \_\_\_\_\_ [2010] 「世阿弥〈伝書〉の根底に潜む逆説的大ダイナミズム：伝書理解のための補助線」(外から見た世阿弥の芸論)、『能と狂言』8、93-99 頁
- 西村清和 [2009] 『イメージの修辞学：ことばと形象の交叉』、三元社
- 野上豊一郎 [1930] 『能：研究と発見』、岩波書店
- \_\_\_\_\_ [1942] 『世阿弥元清』、創元社
- \_\_\_\_\_ [1943] 『能の幽玄と花』、岩波書店
- 能勢朝次 [1940] 『世阿弥十六部集評釈(上)』、岩波書店
- \_\_\_\_\_ [1944a] 『世阿弥十六部集評釈(下)』、岩波書店
- \_\_\_\_\_ [1944b] 『幽玄論』、河出書房
- \_\_\_\_\_ [1982a] 『連歌研究』(能勢朝次著作集第七卷)、思文閣出版
- \_\_\_\_\_ [1982b] 『能楽研究(一)』(能勢朝次著作集第四卷)、思文閣出版
- \_\_\_\_\_ [1982c] 『能楽研究(三)』(能勢朝次著作集第六卷)、思文閣出版

- \_\_\_\_\_ [1984]『能楽研究（二）』（能勢朝次著作集第五巻）、思文閣出版
- 蜂屋邦夫（訳注）[2008]『老子』（岩波文庫）、岩波書店
- 林屋辰三郎（校注）[1995]『古代中世芸術論』（日本思想大系新装版）、岩波書店
- 原田香織 [1986]「〈花〉〈幽玄〉から〈妙花風〉へ：世阿弥能楽論の一つの達成」、『文芸研究』112、18-28 頁
- \_\_\_\_\_ [2014a]「世阿弥能楽論における〈聞〉」、『東洋学研究』51、13-24 頁
- \_\_\_\_\_ [2014b]「世阿弥伝書における〈曲道息地〉」、『文学論藻』88、45-60 頁
- \_\_\_\_\_ [2015]「世阿弥伝書における先祖観：芸術と稽古論から『遊楽習道風見』へ」、『東洋学研究』52、1-15 頁
- \_\_\_\_\_ [2016]「世阿弥伝書における禅的な表現」、『文学論藻』90、37-54 頁
- 久松潜一・西尾実（校注）『歌論集・能楽論集』（日本古典文学大系）、岩波書店、1961 年
- 平田オリザ [2004]『演技と演出』（講談社現代新書）、講談社
- 福田和也 [2006]『バカでもわかる思想入門』、新潮社
- 福田秀一 [1965]「世阿弥と良基」、『芸能史研究』10、46-50 頁
- 藤井和義 [1973]「初心と無心：世阿弥芸論序説」、『神戸学院大学紀要』4、229-253 頁
- ブルーダー、メリッサ（Bruder, Melissa）他 [2012]『俳優のためのハンドブック：明日、舞台上に立つあなたに必要なこと』、絹川友梨訳、フィルムアート社（*A Practical Handbook for the Actor*, Vintage Books, 1986）
- 真壁宏幹 [1987]「世阿弥の稽古論における“能的身体”の形成について」、『哲学』84、165-191 頁
- 増田正造 [1971]『能の表現：その逆説の美学』（中公新書）、中央公論社
- \_\_\_\_\_ [2017]『世阿弥の世界』（集英社新書）、集英社
- 松岡心平 [1983]「能の空間と修辞：世阿弥の“遠見”をめぐって」（中世文学：作家と作品）、『国語と国文学』60(11)、92-99 頁
- \_\_\_\_\_ [1988]「道元と世阿弥」（道元の宇宙）、『国文学 解釈と教材の研究』33(2)、89-95 頁
- \_\_\_\_\_ [1990]「世阿弥の身体」、『文学』1(1)、60-70 頁
- \_\_\_\_\_ [1991]『宴の身体：バサラから世阿弥へ』、岩波書店
- \_\_\_\_\_ [1994]「却来する世阿弥」（能：その美と作者たち）、『国文学 解釈と鑑賞』59(11)、69-75 頁
- \_\_\_\_\_ [1997]「世阿弥の花：花から風へ」（花の古典文学誌：古代神話から江戸の劇空間まで）、『国文学』42(5)、92-99 頁
- \_\_\_\_\_ [1998]『能：中世からの響き』、角川書店
- \_\_\_\_\_ [2000]「風の世阿弥」、小林康夫編『身体：皮膚の修辞学』（表象のディスクール 3）、東京大学出版会、299-336 頁
- \_\_\_\_\_ [2002a]「立つこと：中世的空間の特異性」、五味文彦・佐野みどり・松岡心平『中

- 世文化の美と力』(日本の中世7)、中央公論新社、235-307 頁
- \_\_\_\_\_ [2002b] 「世阿弥と東大寺経弁」、『Zeami』1、199-213 頁
- \_\_\_\_\_ [2007] 「世阿弥の身体論：漢文で書くこと」、東京大学教養学部国文・漢文学部会  
(編)『古典日本語の世界』、東京大学出版会、155-183 頁
- \_\_\_\_\_ [2013] 「鬼と世阿弥」、梅原猛・観世清和(監修)『世阿弥：神と修羅と恋』(能を  
読む2)、角川学芸出版、514-545 頁
- 松田存 [1972] 『世阿弥と能の探求』、新読書社
- 松本孝造 [1970a] 「世阿弥の方法：〈離見の見〉とその能芸意識を巡って」、『国語国文』39(4)、  
16-27 頁
- \_\_\_\_\_ [1970b] 「世阿弥の方法2：音曲論における〈無〉の発現を中心として」、『国語国  
文』39(8)、25-39 頁
- \_\_\_\_\_ [1970c] 「五音の構想：世阿弥の場合」、『国語国文』39(12)、42-56 頁
- \_\_\_\_\_ [1972] 「世阿弥と衆人愛敬」、『国語国文』41(9)、23-29 頁
- 三崎義泉 [1999] 『止観的美意識の展開』、ペリかん社
- 三苦佳子 [1991] 「世阿弥の幽玄観の変遷：〈位の段〉に見る増補の可能性をめぐる」、『能  
研究と評論』18、1-10 頁
- \_\_\_\_\_ [1993] 「稽古習道と天女舞：『二曲三体人形図』の成り立ちをめぐる」、『文芸研  
究』69、87-116 頁
- \_\_\_\_\_ [1994] 「世阿弥の遊楽観」、『民族芸術』10、116-119 頁
- \_\_\_\_\_ [1995] 「却来華と天女舞：世阿弥の九位習道の到達点」、『文芸研究』74、83-112  
頁
- 源了圓 [1998] 「世阿弥の能楽論における宗教と芸術：禅との関わりを中心として」(宗教と  
芸術)、『季刊日本思想史』52、44-76 頁
- 三宅晶子 [1990] 「世阿弥のキーワード：かかり」、『国文学 解釈と教材の研究』35(3)、118-  
119 頁
- \_\_\_\_\_ [1995] 『世阿弥は天才である』、草思社
- \_\_\_\_\_ [2001] 『歌舞能の確立と展開』、ペリかん社
- \_\_\_\_\_ [2013] 『『申楽談儀』世阿弥が語ったこと、語らなかったこと』、『能と狂言』11、  
113-124 頁
- 百瀬今朝雄 [1988] 「二条良基書状：世阿弥の少年期を語る」、『立正史学』64、1-17 頁(百  
瀬 2000 所収)
- \_\_\_\_\_ [1999] 「二条良基と世阿弥：書状を中心にして」、『能楽研究』23、1-11 頁(百瀬  
2000 所収)
- \_\_\_\_\_ [2000] 『弘安書札礼の研究：中世公家社会における家格の桎梏』、東京大学出版会
- 森末義彰 [1971] 『中世芸能史論考：猿楽の能の発展と中世社会』、東京堂出版
- 森永道夫 [1969] 『劇的空間論：能芸に見られる〈冷え〉の意味構造』、桜楓社

- 横道万里雄（校注）[1960]『謡曲集（上）』（日本古典文学大系）、岩波書店
- ラカン, ジャック (Lacan, Jacques) [1991]『フロイトの技法論（下）』, 岩波書店 (*Les écrits techniques de Freud, 1953-1954*)
- 八瀧正治 [1985]『世阿弥の能と芸論』、三弥井書房
- 山崎正和 [1983]『演技する精神』、中央公論社
- \_\_\_\_\_ [1969]「変身の美学：世阿弥の芸術論」、山崎（編）『世阿弥』（日本の名著 10）、中央公論社、7-72 頁
- 尹雄大 [2014]『体の知性を取り戻す』（講談社現代新書）、講談社
- 横山太郎 [2004]「世阿弥発見：近代能楽史における吉田東伍『世阿弥十六部集』の意義について」、『超域文化科学紀要』9、19-45 頁
- \_\_\_\_\_ [2005a]「能勢朝次の世阿弥解釈における〈型〉と〈無心〉：西田幾多郎の影響をめぐって」、『国文学 解釈と教材の研究』50(7)、129-138 頁
- \_\_\_\_\_ [2005b]「日本的身体論の形成：〈京都学派〉を中心として」、『UTCP 研究論集』2、29-44 頁
- \_\_\_\_\_ [2005c]『世阿弥発見：近代能楽の思想史的研究』（東京大学博士論文）
- \_\_\_\_\_ [2012]「能楽研究は近代能楽に何をもたらしたか」（テーマ研究：能楽研究の近未来——新しい視点と方法の試み——）、『能と狂言』10、81-92 頁
- 横田淑子 [平成 3]「序破急論序説：世阿弥伝書にみる〈序〉の本体に関する覚書」、『梁塵』9、17-24 頁
- 芳澤鶴彦 [1994]「離見の見」、『武蔵野女子大学紀要』29、103-112 頁
- 吉村均 [1989]「世阿弥能楽論における〈心〉と〈態〉：『花鏡』『至花道』を中心に」、『倫理学年報』38、125-140 頁
- \_\_\_\_\_ [1994]「佐渡と世阿弥：『金島書』の構成・試論」、『総合芸術としての能』1、16-23 頁
- \_\_\_\_\_ [1996]「恐ろしい鬼・面白い鬼」、『総合芸術としての能』2、18-21 頁
- 米田真理 [2017]「世阿弥の能楽論におけるざわめく観客との対峙：当座の工夫から新たな能作へ」、『朝日大学一般教育紀要』41、54-63 頁
- 渡邊守章 [1984]「美しきものの系譜：花と幽玄」、相良享他（編）『美』（講座日本思想 5）、東京大学出版会、277-319 頁
- \_\_\_\_\_ [1989]「〈開聞・開眼〉のこと：世阿弥における〈音曲〉について」、蒲生郷昭他（編）『音楽の構造』（岩波講座 日本の音楽・アジアの音楽 5）、岩波書店、79-104 頁

## 欧語文献

- Beardsley, M. [1981] *Aesthetics: Problems in the Philosophy of Criticism*, Hackett Publishing
- Goff, Janet. [1997] "The Role of the Audience in Noh", *Acta Asiatica* 73, pp.16-38.

- Hare, Thomas B. [1986] *Zeami's Style; the Noh Plays of Zeami Motokiyo*, Stanford University Press.
- Hare, Tom (trans.) [2008] *Zeami; Performance Notes*, Columbia University Press.
- Higgins K. M. et al (eds.), [2007] *Artistic Visions and the Promise of Beauty: Cross-Cultural Perspectives*, Springer
- Hussain M. et al. (eds.) [2006] *The Pursuit of Comparative Aesthetics: an interface between East and West*, Ashgate
- Ley, Graham. [2000] "Aristotle's Poetics, Bharatamuni's Natyasastra, and Zeami's Treatises: Theory as Discourse", *Asian Theatre Journal* 17(2), pp.191-215.
- Marra, Michele. [1991] *The Aesthetics of Discontent: Politics and Reclusion in Medieval Japanese Literature*, Honolulu: University of Hawai'i press.
- \_\_\_\_\_ [1993] *Representations of Power: The Literary Politics of Medieval Japan*, Honolulu: University of Hawai'i press.
- McKinnon, Richard. [1953] "Zeami on the Art of Training", *Harvard Journal of Asiatic Studies* 16, pp.200-224
- Nagatomo, Shigenori. [1981] "Zeami's Conception of Freedom", *Philosophy East and West* 31(4), pp.401-416.
- Nearman, Mark J. [1984] "Feeling in Relation to Acting: An Outline of Zeami's View", *Asian Theatre Journal* 1, pp40-45.
- Otolani, Benito. [2000] "Zeami's Mysterious Flower: The Challenge of Interpreting it in Western Terms", Stanca Sholz-Cionca and Samuel L. Leiter (eds.), *Japanese Theatre nad the International Stage*, Leiden; Brill, pp.113-132.
- Otolani, Benito and Samuel L. Leiter. [1998] *Zeami and the No Theatre in the World*, A CASTA (Center for Advanced Study in Theatre Arts) Publication: Graduate School and University Center of the City University of New York.
- Pilgrim, Richard B. [1969] "Some Aspects of *Kokoro* in Zeami", *Monumenta Nipponica* 24(4), pp136-148.
- \_\_\_\_\_ [1972] "Zeami and the Way of No", *History of Religions* 12(2), pp.136-148.
- Pinnington, Noel J. [1997] "Crossed Pathes: Zeami's Transmission to Zenchiku", *Monumenta Nipponica* 52(2), pp.201-234.
- Quinn, Shelley F. [2005] *Developing Zeami: the Noh Actor's Attunement in Practice*, Honolulu: University of Hawai'i press.
- Rath, Eric. [2003] "Remembering Zeami: The Kanze School and its Patriarch", *Asian Theatre Journal* 20(2), pp.191-208.
- Raz, Jacob. [1976] "The Actor and his Audience: Zeami's Views on the Audience of the Noh", *Monumenta Nipponica* 31(3), pp.251-274.
- Rimer, J. & Yamazaki M. (trans.) [1984] *On the Art of Noh Drama: the Major Treatises of Zeami*,

Princeton University Press.

Shusterman, Richard. [2009] "Body Consciousness and Performance: Somaesthetics East and West", *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 67(2), pp.133-145

Thornhill, Arthur H. [1997] "Yugen after Zeami", James R. Brandon (ed.), *No and Kyogen in the Contemporary World*, Honolulu: University of Hawai'i press, pp.36-64.

Tsubaki, Andrew T. [1971] "Zeami and the Transition of the Concept of 'Yugen': a Note on Japanese Aesthetics", *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 30(1), pp.55-67

Ueda, Makoto [1995] "Zeami and the Art of the No Drama: Imitation, Yugen, and Sublimity", Hume, N. (ed.), *Japanese Aesthetics and Culture: A Reader*, State University of New York Press, pp.177-193

Yusa, Michiko. [1987] "Riken no Ken: Zeami's Theory of Acting and Theatrical Appreciation", *Monumenta Nipponica* 42(3), pp331-345.

## 論文の内容の要旨

論文題目：成就の詩学―世阿弥能楽論の芸術論的特質―

氏名：玉村 恭

本論は、世阿弥の能楽論の芸術論としての特質を明らかにすることを目的とする。より具体的には、世阿弥が理想の演技をどのように捉えていたか、よい俳優の条件とは何であり、作品にはどのような仕掛けを施すべきであると彼は考えていたのか、そして実際、彼が残した作品にはどのような仕掛けが施されているか――これらの点を、世阿弥の遺したテキストを批判的に読解することにより、明らかにする。

世阿弥の能楽論についての研究はこれまでも多くなされてきたが、伝本の発掘、諸本の比較・校合、本文確定に向けたテキスト批判・校訂の研究は現在に到るまで継続して行われているのに対して、内容理解・解釈の研究は前世紀後半にいったん下火になり、研究にやや遅れが生じている。特に、美学的・芸術学的観点から能楽論を検討することは、その必要性がかなり早くに訴えられていたにもかかわらず、これまで十分にはなされていない。本研究はそうした現状を踏まえ、世阿弥の理論的著作を主たる材料として、彼の思想のとりわけ芸術論としての特質を吟味することを試みる。

能は演劇的パフォーマンスの一種である。演劇的パフォーマンスを構成する要素はいくつか考えられるが、本論では、俳優、演技、作品の三つの要素を重点的に取り上げ、議論の軸に置く。すなわち、本論の主題と問いは大まかに以下のような形で分節される。

- (1) 俳優論：よい俳優とはどのような者か
- (2) 演技論：よい演技とはどのようなものか

### (3) 作品論：よい作品とはどのようなものか

これらの問いを世阿弥のテキストに即して検討すること、それによって、彼がどのような芸術観、演技観を持っていたのか、また、彼の考え方はどのような特徴を持つものと評価されるかを明らかにすることが、本論の目的である。

第一部では、俳優の魅力について論じる。第1章では、世阿弥が芸の魅力(花)にたとえたことに着目し、舞台に(花)が咲くとはどのような事態か、世阿弥が俳優の魅力(花)をどのように捉えていたかを明らかにする。(花)は、身体的な魅力としての(身の花)、精神力ないしは繊細な心遣いの表れとしての(心の花)など、いくつかの層を内に含みこむ。だがそれらはいずれも、(花の種)ではあっても上演の成功をもたらす決定的な条件ではない。舞台に(花)が咲くためには、それらの(花の種)が(能〔作品〕の位、目利〔観客〕、在所・時分)などと(相応)する必要がある。観客や在所・時分の状況は様々であり、何が、あるいはどのようなわざややり方が(花の種)として最適か、一律に定めることはできない。むしろ、その時その場の状況に応じてその都度柔軟に演技を組み立てられること、それができることが、魅力を開花させる最大の(種)なのである。

第2章では、(相応)としての(和合)が実現した時に感じられる面白さ(めずらしさ)とはどのようなものであるのか、分析する。世阿弥は、(面白い)とは(めずらしい)と同義であると考えている。(めずらしさ)には、意外性の契機と必然性の契機が含まれる。この二つは方向性として反対を向いており、両立させることは難しいが、世阿弥によれば、両者を同時に感じさせるのでなければ(面白さ)は生起しない。それができる者こそがよい俳優なのであり、そのような形で演技がなされた時、上演はあたかも人の手を離れてそれ自身の力で(おのずから出で来)たように感じられるだろう。世阿弥が理想としたのは、そのような事態である。

以上の検討から、(花)は俳優と観客の間に棲まうものであり、上演の成功は様々な要素の(和合)(成就)という形で、いわば関係性の上に成り立つものであることが明らかになる。

第二部では、演技を扱う。(和合)を実現するため、役者は諸々のわざや演技をただ行うのではなく、(和合)を可能にするような仕方で行う必要がある。それはどのような仕方がか。

第3章では、謡および舞について論じる。世阿弥は謡を謡う際、どこから・どのように声を出すかに繊細な注意を払うよう指示している。彼が提示したスローガンが(一調・二機・三声)である。演者は舞台に出て最初の一声を発する際、場の状況、とりわけ観客の期待の方向・度合いをよく見計らって、それに(和合)するように声を出さなければならない。場の状況を読み取る手がかりとなるのが、(機)である。(機)とは心が取り得るある状態であり、個を超えたところで流れ漂っているものである。ここを切り口に、演者は観客の(感)に訴え、一座の(感応)を達成することができる。また、(機)は人だけでなく心を持つあらゆるもの(天・地・人のすべて)に想定されるので、これを手がかりに役者は(天地の和

合)をも引き出し得る。謡(およびそれを身体で形象化した舞)は、天地人をつなぐメディアなのである。

第4章では、物まね演技について論じる。能は演劇であるので、役柄の表現が必要である。世阿弥の模倣演技についての原則は、〈よく似せる〉ことである。しかしこれは、人物の外形を事細かに似せることではない。役柄ごとに〈我意分〉を見定め、それに〈成り入って〉演じることである。対象〈そのものに成る〉時、似せようという作為は消え、〈それらしさ〉がおのずと漂うようになる(似せるのではなく似る)。彼の理想とする〈大様な能〉においては、細かな演技はむしろ障害となる。〈我意分〉を踏まえ、それに〈成り入って〉、かつ、音曲(謡)の〈かかり〉の助けを得ることで、細かに似せることなく、それでいて十分な説得力を持つ〈物まね〉を行うことができる。

第三部では、作品について論じる。世阿弥は演技者であると同時に作家でもあった。世阿弥が残した創作論のテキストを読解し、また実際に作られた作品を分析することで、彼の〈作品〉観を明らかにする。

第5章では、創作論のテキストを読む。世阿弥は作品創作にあたり、〈序破急〉の理念を中心に据えた。多くの作品論と同様、彼もまた作品の〈まとまり〉を重視するが、〈まとまり〉をつける機能を〈完結性〉には期待しないのが彼の考えの特徴である。彼は、作品全体を序破急に沿った形で構想した上で、序破急の中ほど(破と急の間)に何らかの形で山場を作ることをよしとした。山場を作ることで作品は一定の輪郭と〈まとまり〉を得るが、それで作品の〈統一性〉は十分に担保されるのであるから、それ以上に強い〈まとまり〉をつける必要はないというのが彼の考えであった。このような方針に従って作られた作品は、いわば作品性を弱め、自然物に近づく。作品もまた、人為を離れ〈おのずから出で来る〉ことが望まれるのである。

第6章では、世阿弥の作品《班女》を取り上げて分析し、和歌的な修辞法を用いて詞章を綴ることを世阿弥が好んだ理由を明らかにする。《班女》の詞章は、古歌を引用したり、縁語や掛詞を用いたりするなど、和歌的な手法をふんだんに用いて綴られている。華やかではあるが、見る者にわかりにくい印象を与えることは否定できない。しかしこれは、世阿弥が意図して行なったものであった。彼は、理解をつまづかせ、認知を拡散させることで、観客がより能動的に参与してくることが期待できると考えた。和歌的な修辞法は、観客の想像力の飛躍を促す仕掛けであり、上演の成就をより好ましい形で引き出すための方策であった。

ここまでが、俳優・演技・作品に関する検討である。この後、派生的な、しかし本論の関心に深く関わる問題を二つ取り上げ、議論を補完する。

第四部では、観客について扱う。第6章で見たように、世阿弥の作品は観客をある意味で混乱させるわけだが、鑑賞の経験として、混乱を楽しむなどということがあり得るのか、それはそもそものような経験なのか。第7章ではこの問題を、世阿弥の有名な文言〈秘すれば花〉の検討を通じて考える。世阿弥によれば、観客に芸を見せる時には、〈秘する〉こと、ある種の〈謎〉をかけることが有用である。しかしそれは、観客をただ驚懼させるためでは

ない。〈謎〉に向き合うことは、概念を拡張し、美意識を更新するきっかけになる。芸を鑑賞するとは〈理解〉を得ることではなく、美的な体験を深めること、内なる創造を行うことである。〈秘する〉こと、鑑賞を攪乱することは、観客の参与をより創造的なものにせんとする工夫だったのである。

第五部では、教育論を取り上げる。世阿弥は教育に関わる主張をいくつか展開しているが、その中で特に興味深いテーゼが〈初心忘るべからず〉である。第8章ではこのテーゼを取り上げる。世阿弥は、〈初心〉、つまり未熟な時の自分を忘れてはいけないという。それは、今の自分（〈後心〉）はかつての自分（〈初心〉）との対比のうちにしか捉えることはできないからである。〈初心〉を忘れないことで、今の自分の状態を的確に把握し、自分の位置を見定めることができる。しかし〈初心〉には、かつてあった自分だけでなく、あり得た自分、あり得べき自分も含まれ得るだろう。〈初心〉を忘れないとは、あらゆる事態のあらゆる可能性に開かれた自分であること。世阿弥はそこまで考えていた節がある。それはもちろん、〈花〉が無数の可能性を持つことと一体のことである。

以上の検討を通じて、本論は全体として次のことを主張したい。世阿弥自身は確かに〈強い芸術家〉であったかもしれない。しかし彼は決して単に戦闘的・攻撃的であったわけではないし、役者たちにそれを求めたのでもない。〈花〉を実現するために必要なのは、上演の場に〈和合〉を実現させる力、すなわち、敵対・拮抗ではなく参与を促す繊細かつ緻密な知性としたたかさ、そして何より、可能性に開かれた柔らかさ、しなやかさである。